

神秘的「飛天」と真民詩 共鳴

砥部・坂村真民記念館

画家・吉永邦治さんとの特別展



「仏涅槃図」(右)など吉永さんの代表作が展示されている—砥部町

「念じれば花開く」などで知られる詩人、坂村真民(1909～2006年)の作品や生涯を紹介する砥部町の「坂村真民記念館」で、「飛天」をテーマに画家、吉永邦治さん(70)の絵画と真民の詩を展示する特別展「吉永邦治と坂村真民の世界」が開催されている。「西洋と東洋が融合した神秘的な世界」などと来館者に好評だ。5月31日まで。

吉永さんは中央アジアからシルクロードを経て、日本にもたらされたという天女「飛天」の研究者としても知られる。砥部町で暮らしていた晩年の真民と親交を結び、強い影響を受けたという。

同展では吉永さんが鉛筆でダイナミックに描いた真民の肖像画や、代表作「仏涅槃図」(縦約1・4メートル、横約10・5メートル)、「釈迦

十大弟子」、色鮮やかな黄と青色を基調にエキゾチックに飛天を描いた「香彩虹奏飛天」などが展示されているほか、仏教をテーマにつづられた真民の詩が共鳴するよう紹介されている。

同館の西澤孝一館長は「真民さんは自分が死んだら飛天になって悲しみに暮れている人々の側に寄り添いたいと言っていた」と振り返ったうえで、同館が東日本大震災から1年後の3月11日に開館したことには思いを重ね、「東日本大震災以降、被災地を飛び回っていると思う」と感慨深げに話した。

同特別展に関連し、29日午後1時半から吉永さんの講演会「飛天へのいさな」が開催される。問い合わせは同館(☎0899・969・3643)。